



現代中国都市部における回族によるイスラーム運動 に関する人類学的研究：雲南省昆明市の事例を中心として

著者	奈良 雅史
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2013
報告番号	12102甲第6763号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00122258

氏 名（本 籍）	奈良 雅史（北海道）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博 甲 第 6763 号
学位授与年月日	平成26年 3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	現代中国都市部における回族によるイスラーム運動に関する人類学的研究 —雲南省昆明市の事例を中心として—

主	査	筑波大学	教 授	Ph.D.	内山田 康
副	査	筑波大学	教 授	博士（文学）	丸山 宏
副	査	筑波大学	准教授	博士（文学）	中野 泰
副	査	東京外国語大学	教 授	修士（文学）	飯塚 正人

論 文 の 要 旨

本論文は、現代中国雲南省昆明市の都市部の回族によるイスラーム宣教運動とイスラーム教育活動などのイスラームの復興に関する運動とこれを担う異なる関心を持つ様々な人びとの日常の活動を詳細に記述して、イスラーム運動が実践レベルにおいては矛盾を孕み、また種々の非宗教的な活動を行いながら展開されていく過程を明らかにしたものである。

中国では1978年の「改革・開放」政策以降、宗教政策の緩和により、宗教が急激に復興してきている。回族社会においても、メッカ巡礼や宣教運動などの活動が活発化し、聖典主義的な宗教言説が影響力を増している。他方、都市部では伝統的な回族コミュニティの解体により、回族と漢族の雑居化と漢族との通婚など漢化の現象も進みつつある。また、政府による宗教の管理統制は、都市部では厳しく行われている。本論文は、回族のイスラーム運動が、このような宗教的、社会的、政治的な状況の中で、教義としてのイスラームや宗教政策に規定されながらも、それには還元され得ない多様な実践からなる様相を明らかにしている。本論文は6章から構成されている。

第1章「序論」では、宗教と世俗の二分法の問題点について再考する。人類学の儀礼研究は、宗教と世俗の区分を自明のものとせず、ホーリスティックに人間の活動を記述してきた。一方、宗教研究では、宗教と世俗の区分を前提とし、両者の関係に焦点を当てる傾向がある。だが、この区分は世俗主義を原則とする近代国家を前提としたものである。よって本論では人類学の儀礼研究の方法に立ち帰り、宗教と世俗を区分せずにイスラーム運動に関する人びとの日常実践を記述し分析する方法を採用する。かくして、回族のイスラーム運動を教義としてのイスラームにも制度的な宗教にも還元せず、回族のおかれた状況の中で彼らが進めようとする運動のあり方とその意味を異なる視点から捉えることが課題となる。

第2章「回族の歴史的背景」では、回族の歴史的な形成過程を概観する。最初に唐代から元代にかけて中国に移住した外国人ムスリムが中国のムスリムへとそのあり方を変えていく過程、清末の回民蜂起に至る過程で鉞山開発をめぐり、漢人とムスリムのあいだの境界が実体化する経緯が描かれる。次に民

族とはみなされていなかったムスリムが「回族」として認定される過程を 1930 年代の政治状況と中国共産党の民族政策との関連から概観する。最後に、現在の昆明市の回族社会では、敬虔化する回族と漢化する回族という二極化の傾向、「敬虔なムスリム」と「漢化した回族」という新たな境界が問題となる現状を示す。こうして「回族」と「ムスリム」が、異なるカテゴリーとして認識されるようになる。

第 3 章「イスラーム復興と漢化のあいだ」では、2 つの運動を事例として、その対照的な展開過程を記述する。一つ目は昆明市におけるダアワ運動の展開である。近代教育に基づく漢語能力と教養がイスラームを理解するうえで不可欠だと理解されているため、世俗的エリートである大学生が宗教的権威を発揮する状況が生まれ、大学生がダアワ運動の担い手となっている。宣教を目的として始められた活動は、普通教育の普及による民族の振興、異性との出会いなど様々な目的を持った参加者たちの利害の部分的共有を通して矛盾を孕みながら拡大していった。二つ目は回族のインターネット・コミュニティを媒介とした公益活動である。回族の伝統的コミュニティが解体するなか、昆明市の回族によりインターネット・コミュニティがつくられ、これを媒介に回族のレクリエーション活動が行われるようになった。結婚や就職が回族社会で広く問題とされる状況下、この公益活動は異性との出会いや就職活動の場も兼ね、敬虔さの度合いを問わず回族が集まる場となっていく。宣教活動と娯楽的な活動が重なり合い、イスラーム運動に関る人びとのアンビバレントな態度が明らかにされる。

第 4 章「宗教」に抗するイスラーム」では、2 つのインフォーマルな宗教活動を事例とし、政府の宗教管理制度との関係を論じる。一つ目は地域を移動して行われるイスラーム学習活動である。昆明市では当局による宗教への締め付けが厳しいが、政治経済的状况と歴史的背景が異なる別の地域では、宗教統制の度合いは異なる。イスラーム学習活動に参加する人びとは、地域間を移動しながら取締りが及びにくい場所で活動を行う。二つ目は昆明市内における非聖職者によるイスラーム教育活動である。昆明市ではモスクや聖職者は政府の統制下にあるため、モスクに依らないイスラーム教育活動が行われる。インフォーマルな宗教活動は、当局からの取締りを受ける度に、抵抗するのではなく、活動を一時的に中断したり、活動場所を変えたり、活動のあり方を変容させながら、断続的に活動を継続していく。制度上の宗教として実体化することを回避しながら展開することで、宗教活動の自律性が保たれる。

第 5 章「ムスリムと回族」では、イスラーム運動に関与する人びとを取りまく重層的な社会的関係に焦点を当て、敬虔さを基準とした「ムスリム／回族」という二分法では捉えられないムスリムとしてのあり方を明らかにする。「敬虔なムスリム」は、教義としてのイスラームを厳格に実践することでムスリムであろうとする。だが学校や職場においては厳格にイスラームを実践することができないために、彼らはムスリムとしての生きにくさを経験する。他方、日常的にイスラームを実践しない回族は、「敬虔なムスリム」から「漢化した回族」と否定的に評価されるが、故郷や自宅などの社会的文脈ではイスラームを実践している事実が明らかになる。彼らにとって「漢化」したとみられる状況は、進学や就職のための一時的なことと理解されている。彼らは「敬虔なムスリム」とは異なり、イスラーム的ではない社会的つながりのなかで、折り合いをつけながらイスラームを実践している。

第 6 章「結論」では、まずイスラーム的・制度的にアンビバレントな回族のイスラーム運動の特徴を論じる。回族の運動は宗教と世俗の区別を横断して、多様な要素を巻き込み展開されるため、統制の対象である宗教の領域の外部に拡がっている。次にこうしたイスラーム運動の特徴を回族のムスリムとしてのあり方との関連から考察する。回族は言説レベルでは「敬虔なムスリム」と「漢化した回族」に分類される傾向にあるが、日常実践においては、敬虔さの度合いに関わらず、部分的に敬虔であり不敬虔であるものにならざるをえない。回族のイスラーム運動が、イスラームの復興や拡大よりも、教育や婚姻を運動の主要な要素とすることに現れているように、中国社会の中であって、それは宗教だけでなく

民族的マイノリティとしての回族を再生産していくことに関わるものである。最後に「回族」という民族的属性よりも「ムスリム」という宗教的属性が今後も重要視されて、漢族が回族のイスラーム運動に参加することや漢族との通婚が許容されるとすれば、回族と漢族との境界を開かれたものへと変えていく可能性をもつことが示唆される。

審 査 の 要 旨

1 批評

イスラーム復興運動に関する多くの研究が、宗教と世俗の分離を前提としてイスラーム復興運動を宗教活動として捉えてきたのとは対照的に、本論文は回族のイスラームの宣教と教育に関する諸活動をアンビバレントなイスラーム運動として捉え直し、このような運動においては、宗教的实践と世俗的な実践の両方が矛盾を抱えながら同時に行われていることを詳細に描き出すことに成功している。回族のイスラーム運動は、国家によるイスラームの統制管理に対しては、統制が厳しい昆明市と厳しくない地域の間を移動し続けることによって自律性を保持し、昆明市内の宗教活動においては、活動の場所、時期、形態を変えながら統制を逃れて自律性を保持していることが明らかにされた。また漢族社会の中で生きねばならないために厳格なイスラームを実践できない「敬虔なムスリム」が抱えるジレンマとその部分的な解決策、「漢化した回族」と見られている回族たちによるイスラームの実践と揺らぎが微細な民族誌として描かれている。本論文は主流のイスラーム研究に比べると、研究の数が未だ少ないマイノリティによるイスラーム運動が抱える矛盾、戦略、異なる関心事、担い手たちの葛藤、政策との関係を微細なニュアンスを込めて詳細に描いた民族誌として高く評価できる。結論部分で、運動の担い手である主体の内面的な問題を描くために用いられたアンビバレントの概念を、回族のイスラーム運動全体に当てはめようとしている点は、今後再考しなければならない。だが、こうした用語法上の問題は、本論文の民族誌としての優れた価値を損なうものではない。

2 最終試験

平成26年1月17日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。